

ニホンアカガエル

Rana japonica Boulenger

無尾目 アカガエル科

環境省 なし

- ❖ 形態 成体の体色はふつう鮮やかな橙色。吻端はやや尖る。背面の皮膚はほぼ平滑で、体側に少數の小さな隆起が弱く現れる。背側線隆条が眼の後方から基本的にまっすぐに伸びる点でヤマアカガエルと区別される。後肢趾間のみずかきはよく発達する。幼生の背面には1対の暗色斑がみられる。
- ❖ 分布の概要 本県が太平洋側の分布北限で、大船渡市、一関市、陸前高田市、奥州市から記録がある。一関市では北上川流域に広く分布する。古い記録では、盛岡市、早池峰山域（県立博物館収蔵標本）、花巻市からの記録があるが、現在の北限は奥州市前沢地区と考えられる。国内では、青森県を除く本州、四国、九州、隠岐および大隈諸島に自然分布するほか、伊豆の八丈島に人為的に移入し定着している。
- ❖ 生息状況 主に平地や丘陵地にみられ、2～4月に広い草地に接する水田地帯や浅い池沼で繁殖する。新しい卵塊はやや粘度が高く形が崩れにくい。繁殖を終えた個体は、草地に移動して生活する。県内では産卵環境の悪化や消失により、減少傾向がみられる。
- ❖ 脊威 園場整備に伴う乾田化による生息環境の分断・消失。コンクリート側溝への転落や移動阻害による斃死。路上での轢死。農薬散布による幼生の発育不全。融雪剤 CaCl_2 の流入による卵および幼生の生残率低下。特定外来生物ウシガエル、オオクチバスによる捕食。
- ❖ 特記事項 日本固有種。遺伝的分化が進んでおり、2ないし3系統が存在する可能性がある。
- ❖ 文獻 1. 松井正文・前田憲男 (2018)、2. 日本爬虫両棲類学会編 (2021)、3. 松島野枝 (2014)

(赤塚 謙一)

クロサンショウウオ

Hynobius nigrescens Stejneger

有尾目 サンショウウオ科

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 成体の背面は暗褐色または青みを帯びた黒褐色を呈し、褐色の斑点をもつ個体もみられる。腹面は灰色あるいは暗黄褐色で、微細な褐色の点に覆われる。胸部には10から12本の肋条をそなえている。尾は長く側扁する。幼生は大きな外鰓を持ち、尾部の背鰓・尾鰓は高く、黒色斑紋に覆われる。
- ❖ 分布の概要 花巻市、北上市、一関市、二戸市、八幡平市、奥州市、零石町、西和賀町、金ヶ崎町、平泉町、住田町、一戸町から記録がある。北上高地よりも東側では確認されていない。国内では東北地方、北関東地方、中部地方北部（佐渡を含む）、福井県に分布する。
- ❖ 生息状況 森林に面した平野部から標高1,500mの山地まで生息する。成体はミミズ類、クモ類、多足類、昆虫類、甲殻類などを摂食する。早春から夏にかけて比較的水深のある池や水たまりなどの止水に集まり、水中の木の枝に紡錘形で乳白色の卵のうを1対産みつける。標高が高くなるにつれて、卵のう中の卵数は少なくなる傾向がみられる。幼生は主にユスリカやケンミジンコなどの小型節足動物を摂食するが、共食いも頻繁に生じる。寒冷地や標高の高い山地では幼生のまま越冬し、翌年になってから変態することもある。
- ❖ 脊威 森林伐採などによる生息環境の分断・消失。湿地の乾燥化や池沼の埋め立てによる産卵環境の消失。コンクリート側溝への転落や移動阻害による斃死。繁殖池に放逐された魚類による捕食。条件付特定外来生物アメリカザリガニによる幼生の捕食。
- ❖ 特記事項 日本固有種。
- ❖ 文獻 2. 日本爬虫両棲類学会編 (2021)、4. 小野康正 (1995)、5. 高橋久 (2001)

(木村 青史)

準絶滅危惧 (NT)

選定要件 ①②

トノサマガエル

Pelophylax nigromaculatus (Hallowell)

無尾目 アカガエル科

環境省 準絶滅危惧

- ◆ 形態 背面は緑色の基色に、褐色、淡灰褐色または黄白色の背中線と背側線隆条がみられる。背面や体側面の暗色斑紋は互いに融合することが多い。繁殖期になると性的二型は明瞭になり、雄は強い黄色味を帯びた婚姻色を呈する。後肢は長く、体軸に沿って前方に伸ばすと、脛跗関節は眼の後縁ないし外鼻孔に達する。後肢のみずかきはよく発達する。
- ◆ 分布の概要 北上市、二戸市、八幡平市、岩手町、西和賀町、軽米町、九戸村、洋野町、一戸町から記録がある。国内では本州（関東地方から仙台平野を除く）、四国、九州に分布する。北海道、対馬の一部に人為移入。また、朝鮮半島、中国、ロシアの沿海州にも分布する。県内では近縁種トウキョウダルマガエルとの同所的な分布域は確認されていない。
- ◆ 生息状況 平地から山地に生息し、5～6月にかけて水田や池沼、湿地などの浅い止水域に集まり産卵する。産卵から1週間ほどで孵化し、幼生は7～8月にかけて変態し上陸する。非繁殖期は水辺から離れた山地でもみられる。冬季は畦などの土中などで冬眠する。クモ類、昆虫類のほか小さなカエル類を捕食する。生息地の連続性が失われつつあり、減少傾向にある。
- ◆ 脊威 水田の放棄、埋め立てなどによる生息環境の消失。コンクリート側溝への転落や移動阻害による斃死。路上での轢死。農薬散布による幼生の発育不全。増加傾向にあるサギ類による捕食。
- ◆ 特記事項 國際自然保護連合 (IUCN) レッドリスト準絶滅危惧。アカガエル属 *Rana* が分割されトノサマガエル属 *Pelophylax* に変更された。
- ◆ 文獻 1. 松井正文・前田憲男 (2018)、2. 日本爬虫両棲類学会編 (2021)、6. 篠田宜道 (1984)
(木村 青史)

留意

選定要件 ①②

トウホクサンショウウオ

Hynobius lichenatus Boulenger

有尾目 サンショウウオ科

環境省 準絶滅危惧

- ◆ 形態 背面は暗褐色または黒褐色を呈し、多くの場合、胴側部に青白色の小班点を有する。腹面は灰白色で、微細な褐色の点に覆われる。胴部には11から12本の肋条をそなえている。寒冷地では後肢第5趾が未発達あるいは欠如する個体が出現することがある。幼生は大きな外鰓を持ち、背鰓・尾鰓はそれほど高くはなく、胴から尾にかけて黒色斑紋を密布する。
- ◆ 分布の概要 県内全域に分布しており、盛岡市、宮古市、大船渡市、花巻市、北上市、久慈市、遠野市、一関市、陸前高田市、釜石市、二戸市、八幡平市、奥州市、滝沢市、零石町、葛巻町、岩手町、西和賀町、金ヶ崎町、平泉町、住田町、山田町、岩泉町、普代村、軽米町、九戸村、一戸町から記録がある。国内では東北地方および新潟県、群馬県、栃木県に分布する。
- ◆ 生息状況 海岸付近から1,000m超える山地にかけて生息する。止水性の種であるが緩やかな流れのある水域を好む。早春に細流のよどみや湧水池、湿地などで、水中の石や木の枝などにゆるく曲がった太いひも状の透明な卵のうを1対産みつける。幼生は動物プランクトンや小型節足動物などを捕食するが、共食いも頻繁に生じる。遅い時期に孵化した個体は幼生のまま水中越冬し、翌年に変態して上陸する。
- ◆ 脊威 森林伐採などの開発による生息環境の分断・消失。側溝のコンクリート化による産卵環境の消失。側溝への転落や移動阻害による斃死。路上での轢死。融雪剤 CaCl_2 の流入による卵および幼生の生残率低下。特定外来生物オオクチバスによる捕食。
- ◆ 特記事項 日本固有種。トウホクサンショウウオ、センザンサンショウウオ、バンエツサンショウウオの3種に分割されるとする見解もある。
- ◆ 文獻 2. 日本爬虫両棲類学会編 (2021)、7. 丸山敏之 (1977)、8. Sparreboom (2014)
(木村 青史)

キタオウシュウサンショウウオ

有尾目 サンショウウオ科

Onychodactylus nipponoborealis Kuro-o, Poyarkov et Vieites

環境省 なし

- ❖ 形 態 成体の眼は突出し、胴側部には11~13本の肋条をそなえる。体長に対する頭胴長や尾長の比率については地域変異が大きい。幼生・成体ともに背面に黄褐色から明赤色、あるいは褐色の縦条をもつ。幼生の四肢の後縁はひれ状になる。幼生と繁殖期の成体には各指趾に黒く尖った爪が良く発達するが、陸上生活する頃になると、爪は消失する。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、宮古市、大船渡市、花巻市、北上市、久慈市、遠野市、一関市、釜石市、二戸市、八幡平市、奥州市、零石町、葛巻町、西和賀町、住田町、山田町、岩泉町、一戸町から記録がある。国内では山形県・宮城県以北の東北地方に分布する。
- ❖ 生息状況 山地の樹林帯に生息し、清涼で水質の良い渓流やその周辺に生息する。初夏に枝沢など最上流部の伏流水で産卵する。卵のうは円筒状または長卵形で透明。幼生は孵化した水域で数年かけて成長し、上陸後は樹林の林床で生活する。
- ❖ 脊 威 森林伐採などによる生息環境の分断・消失。コンクリート側溝への転落や落差工設置にともなう移動阻害による斃死。路上での轢死。
- ❖ 特記事項 日本固有種。2012年にハコネサンショウウオが分割され、北東北の集団がキタオウシュウサンショウウオに分類された。県内で産卵場が確認されているのは葛巻町のみ。
- ❖ 文 献 2. 日本爬虫両棲類学会編 (2021)、9. Poyarkov *et al.* (2012)、10. Yoshikawa *et al.* (2012)

(木村 青史)

アカハライモリ

有尾目 イモリ科

Cynops pyrrhogaster (Boie)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形 態 背面は黒色または黒褐色、赤褐色を呈し、腹面は赤色の基色に不規則な黒斑をそなえるが、地域変異や個体変異が大きい。繁殖期の雄の総排出口付近は大きく膨らみ、ひれ状の尾に灰青色の婚姻色が発現する。雌の総排出口付近は膨らまず、尾は一様に細く剣状に尖る。幼生は大きな外鰓をもち、背面は黒褐色で腹面は淡橙色を呈する。
- ❖ 分布の概要 盛岡市、宮古市、大船渡市、花巻市、北上市、遠野市、一関市、陸前高田市、釜石市、二戸市、八幡平市、奥州市、滝沢市、零石町、葛巻町、西和賀町、金ヶ崎町、住田町、大槌町、軽米町、九戸村、一戸町から記録がある。国内では本州、四国、九州および周辺の島などに分布する。
- ❖ 生息状況 低地から山地の水田、池沼、湿地、渓流などに生息する。春から夏にかけて、雄が放出した精包を雌が取り込んで体内受精させ、池や水たまりなど止水中の水草に粘着性のある卵を1つずつ産みつける。孵化した幼生は水中の小型無脊椎動物を捕食し、数年かけて3~4cmまで成長し、夏から秋にかけて変態し上陸する。本種は移動性が低いことに加え、季節的に生息環境を使い分けていると考えられており、一定の範囲内に異なる生活史段階で必要となる様々な環境の存在が重要となる。
- ❖ 脊 威 池沼の護岸工事や埋め立て、水田周辺の水路のコンクリート化などによる産卵環境の消失。側溝への転落や移動阻害による斃死。路上での轢死。
- ❖ 特記事項 日本固有種。国際自然保護連合 (IUCN) レッドリスト準絶滅危惧。東日本、中部日本、西日本、九州南部の4系統で明瞭な遺伝的・形態的分化がみられる。
- ❖ 文 献 2. 日本爬虫両棲類学会編 (2021)、11. Tominaga *et al.* (2013)、12. 秋山繁治 (2021)

(木村 青史)

留意

選定要件 ①②

トウキョウダルマガエル

無尾目 アカガエル科

Pelophylax porosus porosus (Cope)

環境省 準絶滅危惧

- ◆ 形態 成体の体色に性差はなく、背面の基色は緑色・黄色味が強い。背面や体側面には黒褐色の斑紋がみられ、それぞれ独立し重ならないことが多い。背中線には淡色の縦条が見られ、背側線隆条は明瞭である。後肢は短く、体軸に沿って前方に伸ばすと、脛跗関節は鼓膜の後縁ないし眼の前端に達する。後肢のみずかきはよく発達する。
- ◆ 分布の概要 本県が分布北限で、盛岡市、花巻市、北上市、遠野市、一関市、八幡平市、奥州市、滝沢市、零石町、岩手町、紫波町、矢巾町から記録がある。国内では関東平野、仙台平野、新潟県と長野県の一部に分布し、北海道の一部に人為移入する。県内では近縁種トノサマガエルとの同所的な分布域は確認されていない。
- ◆ 生息状況 平野部の河川周辺や水田に生息する。成体は昆虫類やクモ類、巻貝類といった水陸両方の小型動物を捕食する。主に水田で繁殖するが、浅い池沼や流れの緩やかな小川で行われることもある。小卵塊を数回に分けて産み付ける。本種の生息にはまとまった広さのある水域や移動の障害となるような工作物がないことが重要である。近年は放棄水田が増加しており、生息状況への影響が懸念される。
- ◆ 脊威 水田の放棄、埋め立てなどによる生息環境の消失。側溝への転落や移動阻害による斃死。路上での轢死。農薬散布による幼生の発育不全。増加傾向にあるサギ類による捕食。
- ◆ 特記事項 日本固有亜種。アカガエル属 *Rana* が分割されトノサマガエル属 *Pelophylax* に変更された。
- ◆ 文獻 1. 松井正文・前田憲男 (2018) 、6. 篠田宣道 (1984) 、13. 守山拓弥ほか (2022)

(木村 青史)

留意

選定要件 ①②

モリアオガエル

無尾目 アオガエル科

Zhangixalus arboreus (Okada et Kawano)

環境省 なし

- ◆ 形態 成体の背面は明緑色から暗緑色で、腹面は白色から短黄色である。指趾の先端は吸盤状で、各指趾間にみずかきを有し、後肢ではよく発達する。背表の皮膚は鮫肌状で細かい顆粒におおわれる。後肢腹面の外蹠隆起は不明瞭で認められないことが多い。雄に比べて雌が著しく大きい。
- ◆ 分布の概要 盛岡市、宮古市、花巻市、北上市、遠野市、一関市、陸前高田市、釜石市、二戸市、八幡平市、奥州市、滝沢市、零石町、葛巻町、岩手町、紫波町、西和賀町、金ヶ崎町、平泉町、住田町、岩泉町、田野畠村、軽米町、九戸村、洋野町、一戸町から記録がある。県内西側では奥羽山系に沿って南から北まで連続して分布するが、北上川以東では分布域は連続していない。国内では茨城県を除く本州および佐渡島に分布し、伊豆大島には人為移入され定着している。
- ◆ 生息状況 低地から高地まで生息するが、一般に山地、森林に多い。春季に池沼や水たまり、湿地に集まり、岸際や岸辺の木の枝などに白い泡状の卵塊を産みつける。孵化した幼生は、卵塊から落下して水中生活をはじめ、主に着生藻類とそれに付着した原生動物などを摂食する。繁殖を終えた成体や上陸した幼体は樹林に移動し、クモ類やバッタ類などの節足動物を捕食して生活する。高地や寒冷地では、幼生のまま越冬し翌年変態することもある。
- ◆ 脊威 護岸工事や埋め立てによる産卵環境の消失。森林伐採による生息環境の分断・消失。路上での轢死。繁殖池に放逐された魚類による捕食。
- ◆ 特記事項 日本固有種。国指定の天然記念物：大揚沼のモリアオガエル及びその繁殖地（八幡平市）。県指定の天然記念物：白沼のモリアオガエル繁殖地（零石町）。日本産アオガエル属が *Rhacophorus* から *Zhangixalus* に変更された。
- ◆ 文獻 1. 松井正文・前田憲男 (2018) 、14. 戸田光彦 (2014)

(赤塚 謙一)

カジカガエル

無尾目 アオガエル科

Buergeria buergeri (Temminck et Schlegel)

環境省 なし

- ❖ 形態 成体の体は扁平で、背面には顆粒突起が散在しており、暗色や茶褐色の不規則な模様がはいる。背面の色彩は灰褐色から茶褐色と変化に富む。指趾の先端は吸盤状で、後肢趾間のみずかきはよく発達する。幼生の口器は大きく下向き。尾は細長く筋肉が発達し、基部付近には淡色の横縞が数本入る。
- ❖ 分布の概要 県内全域の河川および各支流に広く分布する。国内では本州、四国、九州に分布する。
- ❖ 生息状況 ダム湖、河川・支流および周辺の山地に生息する。繁殖期は4～8月で、溪流や湖岸の水から出た転石の上で盛んに鳴いて雌を惹きつける。抱接ペアを形成すると、水中の石の下に潜り込み粘着性のある卵塊を産みつける。孵化した幼生は水底の砂利や小石の間で生活し、石の表面の藻類を摂食する。夏から秋にかけて変態し上陸する。繁殖期以外は水辺から離れて樹林で生活する。環境適応力は比較的高いと考えられるが、いったん生息環境が悪化すると回復には長い時間を要することになり、個体群の衰退につながると考えられる。
- ❖ 脊威 森林伐採などによる生息環境の分断・消失。開発とともに山地の貯水力低下による河川の増水や土砂流入による産卵環境の消失。
- ❖ 特記事項 日本固有種。遺伝的分化が進んでおり、東北日本、近畿、西南日本の3系統が認められる。
- ❖ 文獻 1. 松井正文・前田憲男 (2018) 、15. 木村青史 (2021) 、16. Kimura *et al.* (2023)

(木村 青史)

情報不足

ムカシツチガエル

無尾目 アカガエル科

Glandirana reliquia Shimada, Matsui, Ogata et Miura

環境省 なし

- ❖ 形態 ツチガエルに酷似し、背面は暗褐色で短い隆条が散在する。腹面は淡褐色で微細な白色斑で覆われる。後肢の水かきはよく発達する。幼生の腹面に散在する腺の数が少ないとツチガエルと区別できるが、野外での識別は難しい。
- ❖ 分布の概要 本県が分布北限で、花巻市、北上市、遠野市、一関市（旧東山町）、奥州市、金ヶ崎町、平泉町から記録があるが、正確な分布域は不明である。国内では岩手県、宮城県、福島県、関東地方に加え山梨県・長野県に分布する。
- ❖ 生息状況 平地から低山地までの池、水田、河川、湿地に生息し、あまり水辺を離れることはない。河川の疊下など流れが緩やかな水中で越冬することが多い。春から夏にかけて水田や河川の流れが弱い場所にある植物体に小分けに小卵塊を産みつける。孵化した幼生は石や抽水植物の茎などに着生した藻類を摂食して成長する。幼生の一部は年内に変態するが、残りは幼生のまま越冬して翌年に変態・上陸する。越冬は水中の緩い流れのある場所で行われる。
- ❖ 脊威 水田の放棄、河川改修などによる生息環境の消失。側溝への転落や移動阻害による斃死。路上での轢死。特定外来生物ウシガエルによる捕食。
- ❖ 特記事項 日本固有種。2022年にツチガエルが分割され、ムカシツチガエルに分類された。
- ❖ 文獻 17. Ogata *et al.* (2003) 、18. 中野和真 (2022) 、19. Shimada *et al.* (2022)

(木村 青史)